I Kings 18:20-46

カルメル山にて、主対バアルの対決

（Ｉ列王記１８：２０－２１）「そこで、アハブはイスラエルのすべての人に使いをやり、預言者たちをカルメル山に集めた。エリヤはみなの前に進み出て言った。『あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。もし、【主】が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え。』しかし、民は一言も彼に答えなかった。」

イスラエルの人々は、カルメル山に集合しました。これはかなりのコンテストになりそうです。エリヤは、人々の心のうちを知っていました。彼らは生けるまことの神さまを礼拝するふりをしていましたが、同時にバアルも礼拝していました。民がエリヤに答えなかったのは、彼らは自分たちの罪で有罪だったからです。今日、あまりにも忌まわしくなり、神さまの鼻に悪臭を放っているのは、そのような種類の二枚舌であり、二心のある生き方です。教会に関する限り、多くのクリスチャンたちの二重の基準のせいで、多くの人たちは嫌気がさしてしまっています。もしも今日、私が知っているように平均的な未信者が教会を知ったとしたら、その人は教会を訪れるかどうか、疑問です。もしも、ものごとが明らかに分かりやすくされ、単純でまっすぐにされるべき場所があるとしたら、それは教会です。不幸なことに、教会の中でのほうがほかのどこでよりも、二枚舌が使われ、遠まわしに探ることが行われています。

（Ｉ列王記１８：３３）「そこで、エリヤは民に向かって言った。『私ひとりが【主】の預言者として残っている。しかし、バアルの預言者は四百五十人だ。』」

エリヤは、私が喜んでエリヤ・コンプレックスと呼ぶコンプレックスをもっていました。今日でも、そのコンプレックスを起こす人たちがいます。私のミニストリーの中で何度も、私は自分ひとりが残されている、と感じてきました。そのあと、私はテネシー州の谷間に、ジョージア州の丘のふもとに、フロリダ州の湖のほとりに、シカゴの郊外に説教者がいて、その人が神さまのために立ち上がり、私が今まで払ったこともないような大きな犠牲を払っていることに気づくのです。そこで私は、自分のエリヤ・コンプレックスを捨て去り、神さまのために立ち上がっている人々がいることと、私たちが生きているこの時代にあって神さまのみことばが与えられていることを感謝するのです。さて、名前を良く耳にする有名な説教者であるのに、実際に神さまのために立ち上がっていない人々がいることを認めます。神さまのために立ち上がる代わりに彼らはぬらりくらりとしています。彼らは妥協しようとしているのです。私は、ひとりの説教者がひとつの地域ではあるメッセージをし、ふり返って国の別の地域では実際に自分のメッセージをひっくり返すようなことをしていると聞きました。どこへ行っても同じメッセージができないのは、何かがおかしいのです。メッセージがおかしいのか、またはそのメッセージをしている人がおかしいのです。

　エリヤはイスラエルの民に、

「私ひとりが【主】の預言者として残っている

」と言います。彼は間違っています。バアルにひざをかがめていない７０００人の人々が丘に隠れていました。その人たちのことは、私はあまり気にはしませんが、それでも最低、彼らはバアルを礼拝しなかったのです。エリヤは彼らのことは知りもしませんでした。もし、エリヤがその時代にラジオに出ていたとしても、彼らからの手紙は絶対に受け取ることはなかったでしょう。彼らがエリヤをほんのちょっとでも励ますことがなかったのは残念なことです。

　エリヤは民へのメッセージと、バアルの預言者たちへの挑戦を続けます。

（Ｉ列王記１８：２３－２４）「『彼らは、私たちのために、二頭の雄牛を用意せよ。彼らは自分たちで一頭の雄牛を選び、それを切り裂き、たきぎの上に載せよ。彼らは火をつけてはならない。私は、もう一頭の雄牛を同じようにして、たきぎの上に載せ、火をつけないでおく。あなたがたは自分たちの神の名を呼べ。私は【主】の名を呼ぼう。そのとき、火をもって答える神、その方が神である。』民はみな答えて、『それがよい』と言った。」

言い換えれば、エリヤは次のように言ったのです。

「主を経験して、主が良い方かそうでないか、知ろうではないか。もしバアルが神なら、バアルを拝もう。もしそうでないなら、バアルを追い出そう。主である神さまが生ける神さまかどうか、私たちは知りたいのだ。」

今日、神さまはあなたにご自分を知ってほしいと願っておられます。あなたは疑いをもっているかもしれませんが、もし誠実で、本当に神さまを知りたいと思うなら、神さまはご自身をあなたに明らかにしてくださいます。なぜなら、神さまはあなたにご自分を知ってほしいと“願っておられる”からです。信仰は闇の中で手探りすることではありません。私たちの信仰は、事実に基づいています。あなたの救いは、これらの事実を信じ、キリストに頼ることにかかっているのです。

何が起こるか、見てください。これは聖書の中でもっとも劇的なシーンのひとつだと思います。

（I 列王記18：25－28）「エリヤはバアルの預言者たちに言った。『あなたがたで一頭の雄牛を選び、あなたがたのほうからまず始めよ。人数が多いのだから。あなたがたの神の名を呼べ。ただし、火をつけてはならない。』そこで、彼らは与えられた雄牛を取ってそれを整え、朝から真昼までバアルの名を呼んで言った。『バアルよ。私たちに答えてください。』しかし、何の声もなく、答える者もなかった。そこで彼らは、自分たちの造った祭壇のあたりを、踊り回った。真昼になると、エリヤは彼らをあざけって言った。『もっと大きな声で呼んでみよ。彼は神なのだから。きっと何かに没頭しているか、席をはずしているか、旅に出ているのだろう。もしかすると、寝ているのかもしれないから、起こしたらよかろう。』彼らはますます大きな声で呼ばわり、彼らのならわしに従って、剣や槍で血を流すまで自分たちの身を傷つけた。」

バアルの預言者たちは、かなりな見せ物をしています。エリヤはただそこに座り、かなり皮肉っぽく彼らを見ています。彼らはバアルに呼ばわり始めます。何も起こりません。祭壇に飛び上がります。何の助けにもなりません。彼らは狂信的になってきます。多くの感情を表しています。彼らの行動は、ほとんどヒステリックになってきます。ついに彼らは自分たちを傷つけ始め、血がどっと出てきます。彼らはこれで、バアルが行動してくれるだろうと思っています。エリヤは彼らに言います。

「おい、きっとお前たちの神は休暇で出かけてるんじゃないか？だったら帰ってくるまで待たないといけないぞ。もしかしたら、午後の昼寝かな？もっと大きい声で叫んで、起こすんだな。」

エリヤは彼らのパフォーマンスの間、とても楽しいときを持ちました。そして、そのあいだずっと、イスラエルの民は見ています。

ついでながら、「神さまとともにいるものは、大多数である」と言ったのはマルティン・ルターです。そして、彼は自分の体験からそのことばの正確さを知っていました。北王国で大規模な神さまからの離反があったときに、エリヤもこの真理を経験しました。アハブとイザベルのもとで、ほとんど完全な背教がおこりました。エリヤはひとりで立っていたと言っても過言ではありません。7000人のバアルにひざをかがめていない人々がいたのは本当ですが、彼らは山に引きこもっていました、ひとりとしてエリヤとともに立つ者はいませんでした。エリヤは神さまが彼に教えてくださるまで、彼らが存在することすら気づいていませんでした。エリヤは子牛礼拝に立ち向かいました。彼は新しい道徳と教会の中のロック音楽に立ち向かったようなものです。彼はそのときに起こっていた多くのことに異議を申し立て、バアルの預言者たちに妥協することを拒否しました。彼らが新しい「信仰告白」を書いて、神さまのみことばの権威を拒否したとき、エリヤは彼らに反対したのです。

英語の中で、もっとも苦々しいことばは、「ひとりぼっち（alone）」ということばだ、と言ったのはウィルフレッド・ファンク博士でした。（Dr. Wilfred Funk ：1883年3月20日－1965年6月1日。作家であり、詩人、辞書編纂者で出版業者。1925年から1940年まで、ファンク＆ワグナルズ出版の社長を務め、出版社ウィルフレッド・ファンク社の創設者。ウィキペディアより）エリヤはひとりぼっちで立ち上がりました。彼は公共の意見を口にしたのではありません。彼はこだまでもなく、オウムでもありませんでした。彼はほかのだれをも宣伝していたのではありません。彼は政治家ではありませんでした。彼は、群衆の人気を得るよりも、神さまを喜ばせることを考えていました。彼は公共の賞賛よりも、神さまの承認を求めました。彼は公共のパレードの道化師ではありません。彼は神さまのための愚か者（fool：道化師という意味もある）でした。彼はこの世の荒野の、たったひとつの声でした。彼は全力をあげて、サタンと手下どもに対する戦争を続けました。彼はたったひとりでバアルの預言者たちに反対しました。エリヤは、神さまのために劇的な陣を構える場所として、カルメル山を選びました。

何年か前に、私はエリヤとバアルの預言者たちがコンテストをしたとされる、まさにこの地域に立ちました。カルメル山は、ハイファ湾と青い地中海を見下ろす長い尾根です。そして、はるか東には、エスドラエロ

ンの谷にメギドがあります。この劇的な場所に、孤独で堂々としたエリヤの姿がひとり離れて立っていました。彼は孤立していました。バアルの預言者たちのパフォーマンスが始まって数分後には、彼は退屈しているように見えたと思います。そのあと、あの皮肉な微笑が彼の顔をよぎり、彼の声は痛烈な風刺を含んでいます。彼は軽妙なあざけりを使いました。彼はこの預言者たちをからかい、冷笑しました。そしてついに、あざ笑いをおさめながら、彼らにどくように合図をします。

（I 列王記18：29－30）「このようにして、昼も過ぎ、ささげ物をささげる時まで騒ぎ立てたが、何の声もなく、答える者もなく、注意を払う者もなかった。エリヤが民全体に、『私のそばに近寄りなさい』と言ったので、民はみな彼に近寄った。それから、彼はこわれていた【主】の祭壇を建て直した。」
今、エリヤは神さまに頼らなければなりません。主の祭壇は壊れていましたから、エリヤは時間をとってそれを建て直しました。それは劇的な動きでした。

私たちの国に分裂をもたらしたのは何でしょう？ 多くの説明がなされているようですが、神さまから離れてしまったことがこの国の分裂の基本です。昔は一致の尺度というものがありました。それは生ける神さまがおられるという事実に基づく一致でした。そのことは私たちの憲法に書かれています。私たちは神さまに対して責任があります。聖書は権威である、とアメリカが信じていた時代がありました。誰がこの国を分裂させたのでしょう？神さまのみことばを切り刻み始めた人たちです。それが分裂を引き起こしたのです。今日
「さあ、一緒に集まろうじゃないか」
とあまりに多くの人たちが言うのは偽善です。何の上に集まろうというのでしょう？無の上に集まることはできません。

それは、アフリカのジャングルを歩いていた人の物語のようです。彼は象に出会いました。象は彼に言いました。
「どこに行くんです？」
男は答えました。
「どこにも行かないよ。」
象が言いました。
「私もどこにも行かないんです。それじゃあ一緒に行きましょうか。」
今日の群衆と集まるのには、その方法しかありません。あなたは"無“に関して賛成しなければなりません。もしそのようにすれば、あなたはみんなで集まることができるのです。何か中心になってみんなをひとつにするものがなければ、一緒に集まることはできないのです。

祭壇は一致の場所でした。エリヤはその祭壇を建て直しました。
（I 列王記18：31－33）「エリヤは、【主】がかつて、『あなたの名はイスラエルとなる』と言われたヤコブの子らの部族の数にしたがって十二の石を取った。その石で彼は【主】の名によって一つの祭壇を築き、その祭壇の回りに、二セアの種を入れるほどのみぞを掘った。ついで彼は、たきぎを並べ、一頭の雄牛を切り裂き、それをたきぎの上に載せ、」
イスラエルは“ひとつの”国であったことに注目してください。もともと、イスラエルとユダに分かれていたのではなく、サマリヤとエルサレムでもなく、すべて12の部族がひとつの国、イスラエルだったのです。エリヤは主の御名によってひとつの祭壇を築きました。それから彼は祭壇のまわりに溝を掘り、薪を並べ、雄牛を切り裂きました。最後に彼は、四つのかめに水を満たし、それをいけにえの上と薪の上に注がせました。今、水のあるところはうんと下のほうになってしまいました。私がカルメル山に立ったとき、四つのかめに水を運んできた人々は、山の中腹までどのくらいの時間がかかったのだろう、と思います。長い道のりでしたが、エリヤはまったく急いでなどいませんでした。

（I 列王記18：34－35）「『四つのかめに水を満たし、この全焼のいけにえと、このたきぎの上に注げ』と命じた。ついで『それを二度せよ』と言ったので、彼らは二度そうした。そのうえに、彼は、『三度せよ』と言ったので、彼らは三度そうした。水は祭壇の回りに流れ出した。彼はみぞにも水を満たした。
彼らは一度水を汲みに行きました。そしてエリヤは

「もう一度降りていって、かめをみたしなさい」
と言いました。それで十分ではありませんでした。彼は「三度そうしなさい」と言い、彼らは三回目に同じことをしました。もしその日のエリヤを見たなら、彼はその顔に皮肉な笑みを浮かべていたのではないかと思います。その皮肉な笑みは何に関してだか分かりますか？なぜ彼はみぞに水を注がせたのでしょう？神さまだけが不可能を行われるのです。ほんのちょっとの水では火が降ってこないなどということはありません。そこで彼はすべての物の上に水を注ぐことも気にしませんでした。彼はそのときから24時間水を注ぎ続けてもよかったのです。それでもまだ、火は降ってきたことでしょう。エリヤは、神さまに頼ることを学んでいます。私たちはそのことを見てきました。彼が小さな小川のほとりに立って、小川が干上がるのを見ていたとき、彼は自分が、水が流れることのできる水路にしか過ぎないことを知ったのだということを思い出してください。彼はまた、空っぽの粉のかめを覗き込んで、頌栄を歌いました。神さまは、空っぽの粉のかめを使って、干ばつの間エリヤとやもめと彼女の息子とを養われました。そしてそのあと、彼は自分が死んだからだであることに気づきました。エリヤは、もし何かが行われるなら、神さまがそれをなされなければならないということを学びました。彼はその日、そこに立って、皮肉な笑みを浮かべていました。私は、エリヤという人はユーモアのセンスがあったと思います。そして、神さまもユーモアのセンスがあることを私は知っています。エリヤはおそらく小声で
「主よ。もしあなたがこのことをなさらないのなら、このことは起こりませんよ」
と言ったのではないでしょうか。

（I 列王記18：36）「ささげ物をささげるころになると、預言者エリヤは進み出て言った。『アブラハム、イサク、イスラエルの神、【主】よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなたのしもべであり、あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行ったということが、きょう、明らかになりますように。』」
私は、私たちみんなが神さまがなさるのでなければ、ことは起こらないという事実を認められたら良いのに、と思います。エリヤの祈りが理解できますか？聖書の中の偉大な祈りの中のひとつです。長い祈りではありませんが、偉大な祈りです。彼は
「アブラハム、イサク、イスラエルの神、【主】よ」
と言いました。エリヤが“ヤコブ"ではなく、”イスラエル“という言い回しを使っていることに気づかれるでしょう。なぜ“イスラエル”なのでしょう？イスラエルという名前は、12の部族にではなく、ひとつの“国民”に与えられたのです。祈りの中で、エリヤはまた、
「あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなたのしもべであり、あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行ったということが、きょう、明らかになりますように」
とも言いました。あなたも私も、私たちが行っていることは神さまのみこころにそっているのだ、ということを確認する必要があります。自分のやりたいことをやっておいて、あとから神さまに祝福を祈るようなことはしないでください。神さまはそのようには動かれません。もし神さまの祝福を受けたいのなら、あなたは神さまの道を行かなければなりません。私たちは、何ごとも神さまに要求する権利はないのです。神さまは私たちに多くの要求をされるのは本当ですが、私たちは神さまに何も要求してはなりません。神さまはウェスタン・ユニオンの伝令係ではないのです。神さまはあなたの命令に従ってやって来られることはありません。私たちが、神さまのみこころに従って祈るべきなのです。

（I 列王記18：37）「『私に答えてください。【主】よ。私に答えてください。この民が、あなたこそ、【主】よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださることを知るようにしてください。』」
エリヤはこの節で、神さまのご栄光を祈り求めています。それこそ、神さまの御腕を動かすものです。そして、何が起こったか、ご存知ですか？

（I 列王記18：38－40）「すると、【主】の火が降って来て、全焼のいけにえと、たきぎと、石と、ちりとを焼き尽くし、みぞの水もなめ尽くしてしまった。民はみな、これを見て、ひれ伏し、『【主】こそ神です。【主】こそ神です』と言った。そこでエリヤは彼らに命じた。『バアルの預言者たちを捕らえよ。ひとりものがすな。』彼らがバアルの預言者たちを捕らえると、エリヤは彼らをキション川に連れて下り、そこで彼らを殺した。」

何とも残酷なことでしたね。でも、それで確かに背教と異教はなくなりました。

エリヤ、雨のために祈る

（Ⅰ列王記18：41）「それから、エリヤはアハブに言った。『上って行って飲み食いしなさい。激しい大雨の音がするから。』」

人々が神さまに立ち返るとき、雨と祝福がやって来ました。

（Ⅰ列王記18：42－45）「そこで、アハブは飲み食いするために上って行った。エリヤはカルメル山の頂上に登り、地にひざまずいて自分の顔をひざの間にうずめた。それから、彼は若い者に言った。『さあ、上って行って、海のほうを見てくれ。』若い者は上って、見て来て、『何もありません』と言った。すると、エリヤが言った。『七たびくり返しなさい。』七度目に彼は、『あれ。人の手のひらほどの小さな雲が海から上っています』と言った。それでエリヤは言った。『上って行って、アハブに言いなさい。「大雨に閉じ込められないうちに、車を整えて下って行きなさい。」』しばらくすると、空は濃い雲と風で暗くなり、やがて激しい大雨となった。アハブは車に乗ってイズレエルへ行った。」

エリヤは偉大な人物でした！ 干ばつはただの自然の偶然ではなく、懲戒的な措置であると人々が理解するように、干ばつは神の人エリヤの命令で始まったのと同様、神の人エリヤの命令で終わりました。エリヤは雨が降って来ると言いましたが、最初は青い水と青い空意外には何も見えませんでした。でも、七度目に彼のしもべが見たとき、人の手のひらほどの小さな雲が見えました。雲はどんどん大きくなり、天は真っ暗になって雨は干上がった地上を水びたしにしました。

（Ⅰ列王記18：46）「【主】の手がエリヤの上に下ったので、彼は腰をからげてイズレエルの入口までアハブの前を走って行った。」

エリヤはアハブに、急いで家に帰るように言いました。なぜなら、川はすぐにあふれて、渡れなくなってしまうからです。そしてそのとき、エリヤは走り出しました。なぜでしょう？ なぜなら、彼も私たちと同じような情熱を持った人だからです。彼はとても人間的でした。これから、彼がどれほど人間的か、見て行きます。